2015/09/05　山田兼士

谷川俊太郎の詩論詩　「櫂」から現在まで

57

私が歌うと
世界は歌の中で傷つく
私は世界を歌わせようと試みる
だが世界は黙っている

言葉たちは
いつも哀れな迷子なのだ
とんぼのようにかれらはものの上にとまって
　いて
夥しい沈黙にかこまれながらふるえている

かれらはものの中に逃げようとする
だが言葉たちは
世界を愛することが出来ない

かれらは私を呪いながら
星空に奪われて死んでしまう
――私はかれらの骸を売る

（『六十二のソネット』一九五三）

私の言葉　3

あなたの意見は正しい
あなたの意見は正しくない
その少女の鼻は美しい
その少女の鼻は美しくない
四月の風は快い
四月の風は快くない
私の愛しているいない
私の疲れているいない
私の言葉は誰のもの？
私の言葉は空のもの
愛するひとのもの紋白蝶のもの
あなたのズボンのものあなたのズボンの縫目
　のもの
私の言葉は呼ばれたもののためにある
私の言葉は私のためのうそ
私の言葉は街角の赤いポストのもの
泥だらけの鰐のもの
私のドイツ製の鉛筆のもの
あなたのもの
私のうそのとどく限りのすべてのもの

（『愛について』一九五五）

旅　7

岩が空と釣り合っている
詩がある
私には書けない

沈黙を推敲し
言葉に至る道は無い
言葉を推敲し
この沈黙に至ろう

樹の形して
樹は風に鳴っている
それはどこの風景でもいい

見える通りに感ずるなら
すべては美しく輝くだろう
見える通りに書けるなら
時はとどまるだろう

（『旅』一九六八）

襤褸

夜明け前に
詩が
来た

むさくるしい
言葉を
まとって

恵むものは
なにもない
恵まれるだけ

綻びから
ちらっと見えた
裸身を

またしても
私の繕う
襤褸

（『minimal』二〇〇一）

言葉

何もかも失って
言葉まで失ったが
言葉は壊れなかった
流されなかった
ひとりひとりの心の底で

言葉は発芽する
瓦礫の下の大地から
昔ながらの訛り
走り書きの文字
途切れがちな意味

言い古された言葉が
苦しみゆえに甦る
哀しみゆえに深まる
新たな意味へと
沈黙に裏打ちされて

（『こころ』二〇一三）

問いに答えて

悲しいときに悲しい詩は書けません
涙こらえるだけで精一杯
楽しいときに楽しい詩は書きません
他のことして遊んでいます

詩を書くときの心はおだやか
人里離れた山間のみずうみのよう
喜怒哀楽を湖底にしずめて
静かな波紋をひろげています

〈美〉にひそむ〈真善〉信じて
遠慮がちに言葉を置きます
あなたが読んでくだされば
心が活字の群れを〈詩〉に変える

（『こころ』二〇一三）

苦笑い

詩はホロコーストを生き延びた
核戦争も生き延びるだろう
だが人間はどうか

真新しい廃墟で
生き残った猫がにゃあと鳴く
詩は苦笑い

活字もフォントも溶解して
人声も絶えた
世界は誰の思い出？

（『詩に就いて』二〇一五）

その男

〈これは俺が書いた言葉じゃない
誰かが書いた言葉でもない
人間が書いたんじゃない
これは「詩」が書いた言葉だ〉
内心彼はそう思っている
謙遜と傲慢の区別もつかずに

カウンターの端に座っているその男は
紺のスーツに錆色のタイ
絵に描いたような会社員だ
〈ビッグバンの瞬間に
もう詩は生まれていた
星よりも先に神よりも早く〉

思いがけない言葉に恵まれる度に
そんな自己流の詩の定義を
何度反芻したことか
〈言語以前に遍在している詩は
無私の言葉によってしか捉えられない〉
男はバーボンをお代わりする

（『詩に就いて』二〇一五）

詩集

読んだ？
と
あたし

あと少し
と
あなた

詩が
からだに
溶けてゆく
漢方薬みたいに

あなたの
息子が
駈けてきて
あたしの
膝に
乗った

頁の
外にある
弾む
詩

（『あたしとあなた』二〇一五）